

ダブルリミテッド

2022. 6. 23

今までは、コロナ禍が続いていたため、日本に外国の方が労働者として入国することは、さほど話題に上がらなかった。だが、コロナが収まれば、インバウンドをはじめ外国の方が、どんどん入国してくることになるだろう。日本に定住する方も増えていくだろう。

そうになると、日本語がわからないだけでなく、親御さんの国の言語もわからない子どもが出てきてしまう。元々の国の言語も日本語も満足に話せない「ダブルリミテッド」となってしまう子どもが増えていく可能性がある。ダブルリミテッドとは、2つの言語とも十分に発達していない状態をいう。

以前、イタリアのローマ日本人学校に勤務していた。その校舎は、土曜日には、ローマ補習校の校舎となった。補習校とは、何の補習をするのかというと、日本語である。日本の国語の教科書を使って学習を進める。

補習校の子どもたちは、月曜日から金曜日までは、イタリア語や英語を使う学校に行っている。週末の土曜日だけ日本語を学ぶために補習校に通ってくる。親御さんが、自分の子どもに日本語を習得させたいと考えてのことである。

補習校の先生はというと、必ずしも教員免許をもっているとは限らない。イタリアという土地柄からか、音楽を学んでいる方、美術を専攻している方、演劇を生業としている方、イタリア語の習得を目指している方など、多士済々である。ある意味、プロ集団である。

だが、国語を教えることに関しては素人である。そこで、日本人学校唯一の国語専門教員である私の出番となる。年に何回、補習校の先生方を前にして研修会を行った。

日本国内のようにはいかない。先生方の実態も、子どもたちの実態も違う。先生方のご苦労は並大抵のものではない。親御さんの願いも要望水準も強い。そこで、私は4つの柱を考えた。それが、「音読」「作文」「視写」「漢字」である。国語学力の基盤を作るために有効なものである。それぞれ子どもにやらせる方法がある。それを研修会で説明した。

この4つは、補習校に限ったものではない。特別支援教育でも通常の学級でも使えるものである。作文と漢字は、ある程度やるであろう。音読と視写はどうであろうか。以前よりもやらなくなっているはないだろうか。これがよくない。どんどんやった方がよい。

今後、増えていくことが予想されるダブルリミテッドの子どもたちには、日本語の基礎指導が必要となる。通常の学級に、外国出身の子どもたちが当たり前にいる時代はそう遠くはない。学力不振、不適應など、様々な問題が想定される。その要因が、日本語の習得にあるとすれば、何とかしなければならないと考えてしまう。これは、学校だけでの問題ではない。教員だけでなく支援者の研修も充実させる必要がある。教育の力によって、子どもたちを救うのである。